

11. $^{99m}\text{TcO}_4^-$ による食道機能の評価

中西 敏夫 春間 賢 徳富 正
 大道 和宏 佐々木正博 (広島大・放部)
 仙波 真弓 佐藤 友保 勝田 静知
 (同・放科)

各種食道疾患につき $^{99m}\text{TcO}_4^-$ 0.5 mCi を含む水 15 ml を嚥下させ、食道とくに下部食道の RI 通過時間および RI 残存量を検討した。また、本法と open tip 法による食道内圧測定を比較検討した。RI 投与による食道機能検査成績の結果は、以下のとおりであった。下部食道の内圧は、食道通過時間および投与した RI の下部食道ピーク値、および残存 RI 量で表現され、これらの成績は、open tip 法の内圧測定の結果と一致した。しかしながら食道のぜん動運動を表現することは困難であった。本検査法は、簡便で繰り返し検査することが容易なため、食道機能検査として有用と考えられた。

12. 新生児黄疸の肝胆道シンチグラフィー——特に先天性胆道閉鎖症と新生児肝炎について——

下野 礼子 伊東 久雄 福井 聡
 美濃 直子 赤宗 明久 最上 博
 石根 正博 河村 正 飯尾 篤
 浜本 研 (愛媛大・放)

新生児黄疸患者 14 例 (新生児肝炎 7 例, 先天性胆道閉鎖症 7 例) の, ^{99m}Tc -parabutyl iminodiacetic acid (PB-IDA) による肝胆道シンチグラフィー所見の検討を行った。新生児肝炎 7 例中 4 例で腸管への排泄像を認めなかった。また、hepatocyte clearance index による評価を行ったが、両疾患とも肝機能の高度障害例が多く、鑑別に有用な指標とは言えなかった。文献上、 ^{99m}Tc -PB-IDA による肝胆道シンチグラフィーは、胆道閉鎖症の診断において偽陽性例が比較的多い傾向がうかがわれた。

13. ^{133}Xe を用いた肝血流動態の解析 (第 2 報)

安原 美文 石根 正博 伊東 久雄
 村瀬 研也 河村 正 片岡 正明
 飯尾 篤 浜本 研 (愛媛大・放)
 宮内聡一郎 赤松 興一 (同・三内)

^{133}Xe を用いて肝血流量の測定を行った。その際、バルーンカテーテルを使用することにより、門脈血流量を分離して測定する方法を考案した。総肝血流量は従来の報告に一致し、病態が進むにつれて門脈血流量の低下を反映して低下した。肝血流量の右葉と左葉の差は小さく、肝右葉の血流量を肝全体の血流量としても臨床的には問題ないと考えられた。肝細胞癌の血流は約 70% が動脈由来であった。また、肝細胞癌の動脈血流量は非腫瘍部よりも多く、門脈血流量は少ない傾向があった。子宮癌の肝転移の 1 例では、動脈血流量、門脈血流量ともに非腫瘍部に比べ低下しており、動脈血流比は約 40% と低値であった。

14. 各種肝疾患における ^{99m}Tc スズコロイドによる肝・脾 K 値の検討

日野 一郎 細川 敦之 松野 慎介
 高島 均 大川 元臣 玉井 豊理
 田辺 正忠 (香川医大・放)
 水川昶一郎 (住友別子病院・放)

われわれは、 ^{198}Au コロイドを用いて、肝 K 値と肝体積を求め、残存肝機能評価の上で有意な結果を得ている。しかし、 ^{198}Au コロイドが入手不能となり、代わりに ^{99m}Tc スズコロイドを用いて、各種肝疾患について K 値の検討を行った。対象は正常群 12 例、慢性肝炎 13 例、肝硬変 32 例、胆管癌 8 例、転移性肝癌 5 例である。正常群と肝硬変群との間には 0.1% 以下、慢性肝炎群と肝硬変群との間には 1% 以下の危険率で有意差を認めたが、肝硬変を除く他疾患群と正常群との間に有意差はなく、また、脾の K 値については、各疾患群の間に有意差は認めなかった。われわれの残存肝機能評価法において、 ^{99m}Tc スズコロイドは使用可能な薬剤と思われる。